

り、其中に識神をやどす」(佐渡御書)「日蓮はわるき者にて候へどもゝさるにては日蓮はわるくてもわるかるべし、わるかるべし」(西山書)「一度にをもひ切つてうえしなんとあんじ切つて候つるに」(上野書)「結句は一人になつて日本国に流浪すべきみにて候」(富木書)という「人間的」な反省、感懐があることは現実の地涌として遇然ではないのである。

×

現代は「地涌」の道が踏み消され、仏法衰滅に委ねられた時代であることは、ほぼ、治定である。

アジア、アフリカ圏協会(事務所全上)代表理事。別にアフリカ学会、日本民族学会、立正大学仏教学会、日本哲学会、各会員

## 根本仏教の縁起観について

中 野 裕 道

一

仏教の用語は、禪定によって逮得された般若智から生れて来たもので、仏陀と同じような内観の境地に立つて始めて理解されるものである。教理の解説が学問的立場から為されるときに、往々にしてその意義が謬り伝えられることがあるのはそのためである。われわれは今、大乘仏教の浩瀚なる体系に傾倒するよりもさきに、まず仏陀出世の本懐ともいふべき縁起の理について、根本仏教の中にその正しい意義を探り当てなければならぬ。

釈尊が正覚を得られたのは、内観によって十二因縁の理を証得したからだといわれるが、仏教学者は内観という言葉を使いながら、その意義を深く心に留めて考察してないようである。仏教は内道とも称する如く、坐禪入定の修行によって心の内側を探索するものであり、内観の立場を

離れて仏教用語の正しい意義を捕捉することは困難である。インド五明の一つで内明といわれる修法も、内觀の道を意味したであろうことは明白である。仏教では外的環境の問題は当初から捉えられていないのであり、もしこの問題が採り挙げられていたとしたら、仏教の教理は最高の哲学として完成していたかも知れない。と同時に宗教としての生命を涸渇せしめ、解脱する者は跡を絶ったであろう。

仏陀は形而上学的追及を避けて、悟りの足しにならぬ問題は意中から悉く除去し、堅実に内觀の道を固守したのであった。仏教を理解するには、まずこの内觀の立場を己のものとして取得しなければならぬのである。

さて十二因縁の思想に哲学的な新しい解釈を加えた最初の人、マクス・ワレザーだといわれているが、明治の末期に松本文三郎氏もその解釈に刺激されて、十二支縁起は原因結果の關係を述べたものではなく、論理的關係を表わしたものに過ぎないと力説して、縁起の思想から特に時間的觀念を除去しようと努力した跡が見える。この新解釈は宇井伯壽氏に引継がれて学界に普及したが、この説明の仕

方は縁起論を内觀の立場で見ているものではなく、机の上で哲学的にのみ割り切ろうとしたものであり、仏教の術語を実践的に受け取る立場として相應しいものではない。東洋的思惟に疎い一外国人の模索が哲学的であったのは致し方がないとしても、仏教独自の内觀的立場を喪失してまで同調するのは、仏教者として不見識の譏りは免れまい。縁起の解説が仏教の軌道を外れて、今日も猶殆んどそのまゝであるのは遺憾の至りである。

かくて近頃の仏教学者は、縁起の法則を客觀の世界に見ているが、寔に大きな解釈上の失態であるといわなければならない。仏教は内觀の道なるが故に内道と称するのであり、もし自然界を採り挙げて論及しているものとすれば、これは真理を外側に追ひ求める態度であるから、明らかに外道といわれるべきものである。縁起とは、縁に依つて起るという意義を、内觀の立場で素直に認めればよいのである。時間的觀念を締め出して、縁に依つて起つ、と言ひ換えて見ても、哲学的解釈としては面白いかも知れないが思索上の遊戲でしかなく、悟りが開ける筈もないのである。

縁起に関する筆者の見解を述べるためには、「無常偈」の偈文を選んで解説するのが最も分り易いと思うので、今は斯かる便宜に従って根本仏教の縁起觀を略説することにした。

## 二

諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為樂

まず従来の解釈では、諸行を自然現象に取っているが、根本的な間違である。この場合の「行」は原語がサンスカラ（造作の義）であり、行為と作用の意義を含めて「爲作」と訳することもあるように、無明・行・識の場合にしても、色・受・想・行・識の場合にしても、同様に精神現象であることに着目しなければならない。原語の語義を知らぬ筈もない専門学者が、内觀の立場から逸脱して外道の立場へ転落しているのは不可解である。

わが国のいゝは歌は、この偈文を日本訳したものだといわれ、作者を弘法大師に擬しているが、三地の菩薩とまでいわれた密教の大師・空海が作ったという伝説に疑問があることは、今日の哲学者と同様の謬りを冒して、仏教の正

統思想を全く表現し得ていないからである。

無常であるのは、客觀界に存在する自然物ではなくして、心の中に生滅する雑念や妄想の如き精神的存在物であった。もしこれを外界の客觀的存在物と見做すときには、偈文の後半との繋りが断たれて、寂滅とは一体何を意味するのか、不明瞭になる。仏教でいう寂滅は、精神現象としてキリスト教の転回にも相当する言葉であるから、偈文も首尾一貫して内觀の世界を叙述したものと見なくてはならない道理である。

因みに、諸行は精神現象であるが、存在という方面からいえば、諸法という語に置き換えてもよく、術語として翻譯するときは、概念上の区別はあろうけれども、體驗という立場から見れば同一事態に他ならない。実践的には意義内容が全く同じと見なければならぬものだ。華嚴經実説品の「是の如き諸法一切皆是れ思惟の造作なり」という義もこの意味に解せられよう。大乘唯識の心外無法に依らなくても、諸行も諸法も精神界のものであるという基礎知識は心得て置くべきである。

精神現象というのは意識の流れで、次から次へと生じた

り滅したりするものだからこそ、遷滅無常の法といわれるのである。かく見た場合に、諸行無常・是生滅法の意義が正しく把握出来るのである。そして次の生滅々已は、このように生じたり滅したりすることが無くなることを意味するのであり、その境地が雑念・妄想の停止した寂滅に他ならない。「善男子よ、無生法は来なく去なし、無生法即ち仏なればなり」と般若経法尚品は言っている。この境地で始めて涅槃の樂が得られることを、この偈文は述べているのである。

通途の解釈は、偈の前半が自然現象、後半が精神現象であり、二者が木に竹を繋いだ如くで、一貫した意義の表現とならない。これでは半偈のために身を投げたという雪山童子の意中が図り知れないことになる。但し、パーリ語の原文によって見ると、訳文の上に聊か問題点がないでもない。

「諸行は実に無常であり、生と滅との法あるものであり、生じては滅するのである。かれら「諸行」の寂滅

は樂である」

漢訳と比較対照して見ると、第三句に少し相違がある。漢訳の方が縁起の思想を着実に表現し得ていることを知る。何となれば、生じたものが滅するのが寂滅なのではなく、生じたり滅したりすることの無くなるのが寂滅だからである。精神統一をして坐禪入定の体験がある人ならばこの辺の真理は自明の筈である。

### 三

仏教では、心の外側にある事象が心の中に取り入れられてから、始めて問題になるのである。これを「受」とか「取」とか「集」とかいうのであるが、実践的には皆同じ意義のものである。已れより離れて無関係にある存在は、そのまゝでは問題とならない。「法」というのも、心の中に思い泛べられた限りのものをいうので、「一切法」という場合も同断であり、無関係の一切を含む意味のものではない。「法界」というのもその人の心の中の世界であり、一心法界という言葉が最も端的にその意義を尽している。一心の成仏が法界の成仏だといわれるのも、この意味に他

ならない。仏教は、一人が成仏すれば万人が成仏するなどと、無茶な觀念論を展開したものではないのである。法を心の外に見て来た従来の解釈には相当の誤解があったようだ。

「有為法」にしても「作られたるもの」という義であるが、山川草木など自然界の事象を有為法に見立てた旧來の説明が如何に間違つたものであるかは、最早繰り返して述べるまでもない。自然現象は人間が作ったものではないから、有為法とはいえないのである。仏教は創造神を認めないので、造化の神が作ったともいえないであらう。人間が作り上げた有為法なるものは、心の中に去來するあれや、これやの雜念妄想の類である。遷滅無常という有為法の実態は、すべてこれ精神現象に他ならぬのであった。「一切の有為法を行と名づく」という『仏性論』や「虚妄分別を有為と名づけ、二取の空なるの性を無為と名づく」という『弁中辺論』の言葉を深く味読すべきであり、また「一切の法は皆心より起り、妄念より生ずるを以てなり」という『大乘起信論』も、叙上の論証によき示唆を与えるものと

して參考になると思う。

尚、縁起について最後に補説して置きたいことは、凡夫の精神生活は全く「依他性」のものだということである。

依他性とは縁起の謂であるが、他に依存して成り立つ精神生活は、環境に押し流されて主体性を滅却した俗物の生活態度である。「受の滅による無相の心三昧」と『長部阿含經』にあるように、受容すべきものと然らざるものとを弁別して、精神衛生の基盤を心中に確立するのは、無上正覺といわれる般若智に如くはない。

されば、縁起の世界とは凡夫的境界のことであり、仏の境地は縁起の世界を超えたところにあるのである。依他性の精神生活を脱却して「己れこそ己れの主である」境地を獲得し、「自らを灯明とし自らを依処として住する」ことが出来れば倅せなる哉である。縁起を超出したときに真如が逮得されるが、悟っても迷つても仏教學者のいう自然界の相依相關の關係はなくなるものではない。忠実に内觀の行を修するならば、縁起の理は體驗によって釈然とするに相違ないのである。(四三・一・一一)